２０２５．８．２４（日）使徒２５：１３～２７

25:13 数日たって、アグリッパ王とベルニケが、フェストゥスに敬意を表するためにカイサリアに来た。
25:14 二人がそこに何日も滞在していたので、フェストゥスはパウロの件を王に持ち出して、次のように言った。「フェリクスが囚人として残して行った男が一人います。
25:15 私がエルサレムに行ったとき、祭司長たちとユダヤ人の長老たちが、その男のことを私に訴え出て、罪に定めるよう求めました。
25:16 そこで、私は彼らにこう答えました。『訴えられている者が、告発する者たちの面前で訴えについて弁明する機会が与えられずに、引き渡されるということは、ローマ人の慣習にはない。』
25:17 それで、訴える者たちがともにこちらに来たので、私は時を移さず、その翌日に裁判の席に着いて、その男を出廷させました。
25:18 告発者たちは立ち上がりましたが、彼について私が予測していたような犯罪についての告発理由は、何一つ申し立てませんでした。
25:19 ただ、彼と言い争っている点は、彼ら自身の宗教に関すること、また死んでしまったイエスという者のことで、そのイエスが生きているとパウロは主張しているのです。
25:20 このような問題をどう取り調べたらよいか、私には見当がつかないので、彼に『エルサレムに行き、そこでこの件について裁判を受けたいか』と尋ねました。
25:21 するとパウロは、皇帝の判決を受けるまで保護してほしいと訴えたので、彼をカエサルのもとに送る時まで保護しておくように命じました。」
25:22 アグリッパがフェストゥスに「私も、その男の話を聞いてみたいものです」と言ったので、フェストゥスは、「では、明日お聞きください」と言った。
25:23 翌日、アグリッパとベルニケは大いに威儀を正して到着し、千人隊長たちや町の有力者たちとともに謁見室に入った。そして、フェストゥスが命じると、パウロが連れて来られた。
25:24 フェストゥスは言った。「アグリッパ王、ならびにご列席の皆さん、この者をご覧ください。多くのユダヤ人たちがみな、エルサレムでもここでも、もはや生かしておくべきではないと叫び、私に訴えてきたのは、この者です。
25:25 私の理解するところでは、彼は死罪に当たることは何一つしていません。ただ、彼自身が皇帝に上訴したので、私は彼を送ることに決めました。
25:26 ところが、彼について、わが君に書き送るべき確かな事柄が何もありません。それで皆さんの前に、わけてもアグリッパ王、あなたの前に、彼を引き出しました。こうして取り調べることで、何か私が書き送るべきことを得たいのです。
25:27 囚人を送るのに、訴える理由を示さないのは、道理に合わないと思うのです。」

＜説教＞

使徒パウロはカイサリアにいて、総督フェストゥスのもとで裁判を受ける身となっていました。フェストゥスはローマ皇帝カエサルによってユダヤの総督に任命された人でした。フェストゥスの前任者がフェリクスでした(24:27)。パウロがそんな裁判を受ける身とな

っていたのは、ユダヤ人の祭司長たち、長老たちから訴えられていたからでした(15)。なぜ訴えられたかと言うと、パウロがイエスこそ神の御子、救い主、キリストであると宣べ伝えていたからでした。イエスを信じようとしないユダヤ人たちは、そんなパウロを嫌い、憎み、なんとか殺してしまおうと長い間執念深く考えていました。

そんな中で、新任の総督としてユダヤ人たちの機嫌を取ろうとしたフェストゥスがパウロに、エルサレムで裁判を受けることを望むかと聞きました(9)。しかしパウロは、ユダヤ人たちから訴えられるような悪いことは何もしていないのでエルサレムでユダヤ人たちに引き渡される必要はないとし、またローマ市民権をも用いてカエサルに上訴すると主張しました(10-11)。それに対してフェストゥスは「おまえはカエサルの上訴したのだから、カエサルのもとに行くことになる。」と答えました(12)。こうして、ローマでも主イエス・キリストの証しをしなければならないとの務めをパウロにお与えになっていた主のみこころがまた一歩前進しました。もちろんパウロ自身も主のみこころに従い、もうエルサレムに戻ることなく、カイサリアからローマに向かべく、カエサルに上訴すると言ったのでもありましょう。

さてしかし、パウロがローマに行く前に、ここカイサリアでなすべき務めがありました。それは、総督フェストゥスの前で、そして当時やはりローマ皇帝カエサルの権威のもとでユダヤの王として認可を受けていたアグリッパの前で、イエス・キリストの福音を宣べ伝え、証しすることです。そのパウロの証し、福音の説教は 26 章に記されていますが、本日の聖書箇所にはそのようになった経緯が書かれています。

パウロの上訴をフェストゥスが認めてから〈数日たって、アグリッパ王とベルニケが、フェストゥスに敬意を表するためにカイサリアに来〉ました(13)。このアグリッパ王は、12 章に出てきたヘロデ王（アグリッパ一世）の子で、ヘロデ大王のひ孫となります。なお、ベルニケもヘロデ・アグリッパ一世の娘なので、アグリッパ王の妹です。フェストゥスがカエサルに任命されて総督としてユダヤに来ていましたが、ユダヤ人を上手く統治するために「ユダヤ人の王」がいることもカエサルによって許可されていました。新任の総督フェストゥスに〈敬意を表するためにカイサリアに来〉たアグリッパ王に、フェストゥスはパウロのことを話してき聞かせました(14-21)。

〈私がエルサレムに行ったとき…〉(15)と始まって、〈…彼をカエサルのもとに送る時まで保護しておくように命じました〉(21)で終わるフェストゥスの話は 1 ～ 12 節に記されていたことです。それをフェストゥスが改めて、自分のことばで、またアグリッパ王に対する話しとして話したわけです。

パウロを訴えたユダヤ人たちに対してフェストゥスは、ローマの法律に従って彼らを支配し、監督し、統治し、裁判する権威ある総督として行動したことを話したようです。ユダヤ人たちのパウロに対する訴えについては、〈私が予測していたような犯罪についての告発理由は、何一つ申し立てませんでした〉、つまりパウロはローマ法に照らしては無罪でした。フェリクスにはそのことは確かでした。しかし彼には「どう取り調べたらよいか見当がつかない」、全く分からないことがあることが分かりました。それが〈彼ら自身の宗教に関すること〉、特に〈死んでしまったイエスという者のことで、そのイエスが生きているとパウロは主張している〉ということでした。今までもパウロは総督フェリクスの前でも自分は死者の復活のことでユダヤ人たちと争っていることを証言していました

(24:21)。フェストゥスへの言明としては「私は、ユダヤ人の律法に対しても、宮に対しても、カエサルに対しても、何の罪も犯してはいません」(8)とのことでしたが、ここに来て（私たちにも）分かったことは、パウロはイエスの死と復活をフェストゥスにも証ししていたということです。パウロが言う「死者の復活」とは、確かに「正しい者も正しくない者も復活する」ということ(24:15)なのですが、それもまず「死者イエスの復活」があってこそのこととしてパウロは語っていたのです。〈もし死者の復活がないとしたら、キリストもよみがえらなかったでしょう〉（Ｉコリント 15:13)と既にパウロはコリントの教会にも書き送っていたことでした。先にパウロがフェリクスに語った「来たるべきさばき」(24:25)も、復活のイエスが再び来たりておさばきになる、または復活のイエスの前に出てさばかれると語ったのでしょう。フェストゥスもそのような神のみわざ、イエス・キリストのみわざが信じられなかったのでしょう。

さてそんなフェリクスの話しを聞いたアグリッパ王はパウロの話しを直に聞きたいと思い、翌日パウロと会うことになりました(22−23)。

フェストゥスはアグリッパ王にパウロを紹介しました(24)。〈大いに威儀を正し〉(23)、つまり立派な服装で着飾り、権威ある態度で出てきたアグリッパとベルニケ、そしてその他大勢の権力者たち(23)の前に引き出され、「この者をご覧ください」と言われたパウロは何か「見世物」のように扱われているように思えます。しかし人の目にどう見えたかはどうであれ、実際はパウロの方こそ腹が据わっており、堂々としていました。復活のイエス・キリストを信じないユダヤ人たちが訴えるような〈死罪に当たる〉ことをパウロが何一つしていないことは、フェストゥスにも明らかでした。もちろん復活の主イエス・キリストの前にも明らかでした。

ユダヤ人であれ、アグリッパ王であれ、フェストゥスであれ、誰に何を言われてもパウロは恐れませんでした。それは復活のイエスを「わが主」としていたからです。フェリクスは「彼について、わが君に書き送るべき確かな事柄が何もありません」と言い、アグリッパ王の力をも借りて、何とか自分の〈君（「主」とも訳せます）カエサルに対して忠実に務めを果たそうとしました(26−27)。それはそれでいいのですが、復活のイエス、生きているイエスを〈わが君〉「わが主」として信じ受け入れていませんでした。それで、「死んでしまったイエスが生きている」ということが、それを信じないユダヤ人たちにとって、どんなに大きな問題になっていたのかが分かりませんでした。それがフェリクスの決定的な弱さでした。ローマ帝国の支配者カエサルに対する「申し訳」を立てることには心砕きましたが、復活のイエス、今も生きて働いておられ、そのみこころを必ず成し遂げられるイエスを「わが主」としていませんでした。それで、〈ユダヤ人たちの機嫌を取ろう〉ともしたのです。

一方、パウロには「復活のイエス、わが君、わが主に告白すべき確かな事柄」がはっきりとありました。それは即ち主への信仰であり、また自らの罪でした。